

## 安成通信 2019.05.12. 新緑の東山を望んで



<故郷や どちらを見ても 山笑ふ> 子規

新緑の季節です。京都市内や周りの山々には明るい緑の樹々が息づき、まさに「山笑う」という季語がピッタリの季節です。桜や紅葉もいいですが、京都の新緑はまた格別です。

ただ、やや気になっているのが、クリーム色（白緑色）の盛り上がったように元気そうな樹々が、以前にも増して多くなっていることです（写真参照）。近くに行くと、栗の花に似た、やや生ぐさいような香りが漂っています。シイノキ（椎木）が、緑の若葉を広げて白っぽい花を咲かせているのです、秋になるとドングリがたくさんできます。

東山の森林・植生は、江戸時代以降、さまざまに変化しています（安成通信 2019/03/24 「菜の花」考 参照）。原植生だった照葉樹林は平安時代から江戸時代の木材利用や薪炭のための伐採でアカマツ林に替わり、江戸時代後期になると、一部はげ山や草原になっていたようです（高原光・奥田賢、2008）。しかし、明治に入り、燃料が石炭や石油に代わると薪炭を取ることもなくなり、アカマツ林が復活し、シイなどの常緑広葉樹林も一部入ってきました。戦後はスギ・ヒノキの植林も増えてきました。あまり記憶にはありませんが、私が学生の頃に見たり歩いたりした東山は、このような森林だったようです。

ただ、1970年代から、マツ枯れによって、アカマツは減ってきました。この時期はまさに日本の高度成長経済期であり、北米からの木材の大量輸入などに伴って、日本の林業が危機的状況になった時期でもあります。輸入木材と共にマツ材線虫がマツノマダラカミキリという昆虫を媒介にして入り込み、大量のマツ枯れを全国的に引き起こし、アカマツは集団的に枯死していきました。アカマツ亡き後に急激に増加してきたのが、（コジイ、スダジイなどの）シイなのです。東山の東斜面（京都盆地側）の大部分もシイの樹林になってしまい、特に、写真にある知恩院裏の山は、「みごとな」シイ林となってしまいました。

ただ、山中に入ってみるとよく分かりますが、樹々は密集し過ぎており、鬱蒼とした暗い林床には、下生えが非常に貧弱です。近年増え続けている鹿が森林内の植生を食い荒らす被害も影響しているようです。このままでは、今年の台風のような災害や病害虫による枯死が起こりやすい、「脆い」森林になってしまう可能性があります。

森林は、全面的な伐採は、もちろん生態系の破壊そのものになりますが、経済や産業構造の変化などでほとんど利用されなくなることも、生態系には負の大きな影響をもたらします。さらに、高度成長経済に伴う木材輸入は、マツ枯れの引き金になっています。人は森林を適度に利用して手入れし続けることにより、人と自然の持続可能な関係が保てるのです。「自然保護」とは、森林を伐らないことではないと、森林生態学者の只木良也氏は強く指摘しています（只木、2013）。

湿潤温暖なモンスーン気候帯にある日本では、気候が変わらない限り、森林に攪乱やダメージを与えても、多くの場合、元に戻ることはなくても、別の樹種や植物相に遷移しても、森林は必ず

何らかのかたちで再生します。一方で、熱帯や寒帯、あるいは乾燥地域では、森林そのものが森林に好ましい気候や水循環を維持している仕組みのあることが、私たちの研究でも示唆されています。このような場合、森林の大規模な伐採は、森林の再生を不可能にする可能性が高いことにもなります。

東山の新緑を観ながら、千年以上にわたって続いてきた京都の歴史における森林の役割や意味を想い、そして、ありがたさを改めて感じています。

＜新緑や千年万年いつまでも＞ 哲風

参考文献：

京都伝統文化の森推進協議会編「京都三山の危機－森林の荒廃・景観の変貌が進んでいます」

引用文献：

高原光・奥田賢（2008）『古都の森を守り活かす——モデルフォレスト京都』京都大学学術出版会、2008.

只木良也：自然保護とは伐らないことか。森林雑学ゼミ 2013.06

<http://shinrinzatsugaku.web.fc2.com/zatsugaku1306.html>



知恩院の黒門と東山の新緑。明るい新緑の樹々はシイ。（2019年5月8日 安成撮影）